

橋本多佳子句抄

藪野唯至選 (六十一句)

「やぶちゃん注」底本は一九八九年立風書房刊「橋本多佳子全集」を用いたが、彼女は戦前から活動した作家であることから、私の特に俳句のテキスト化ポリシーに従い、戦前の句集「海燕」(昭和一六(一九四一)年交蘭社刊)と戦前の作品を含む「信濃」(昭和二二(一九四七)年白井書房刊)から選句したもの(具体的には冒頭から「いなびかりくすし醫師くすしの背よりわがあびぬ」まで)は恣意的に漢字を正字化して示した。本オリジナル選句は今から十年ほど前に行ったものである。現在、私はブログ・カテゴリ「橋本多佳子」で全句電子化(一部にオリジナル補注を附す)を行っている。なお、この頁は私のブログの五八〇〇〇〇アクセス突破記念として作成した。【二〇一四年六月五日】PDF版を作成した。「海」の字は転倒してしまったため、仕方なく「澆」とした【二〇一四年八月二十九日】

藪野直史

凧の白雲ひとつ光りてゆけり

曼珠沙華身ぢかきものを焼くけぶり

死にちかき面に寄り月の光るをいひぬ

月光にいのち死にゆくひとと寝る

第二火口

火吹くとき夏日を天に失へり

ひとを送り野のいなずまに衝^うたれ立つ

寂しければ雨降る露に燈を向くる

夫の忌に

月光に一つの椅子を置きかふる

菜殻火のけむりますぐに昏るるなり

ひと日臥し卯の花腐し美しや

いなびかりくすし醫師の背よりわがあびぬ

凍蝶に指ふるゝまでちかづきぬ

凍蝶も記憶の蝶も翅を欠き

凍蝶を容いれて十指をさしあはす

凍蝶のきりきりのぼる虚空かな

雪はげし抱かれて息のつまりしこと

雪はげし夫の手のほか知らず死す
つま

かじかみて脚抱き寝るか毛もの等も
ら

牡丹雪さはりしものにとどまりぬ

鶏しめる男に雪が殺到す

河豚の臍喰わたべたる犬が海を見る

初蝶や一途に吾に来ることし

夕焼けて牧師の耳朶の女めく

春空に鞠とどまるは落つるとき

厚板の帯の黴より過去けふる

白桃に入れし刃先の種を割る

罌粟ひらく髪の先まで寂しきとき

夫恋へば吾に死ねよと青葉木つま
樹

螢籠昏ければ揺り炎えたゝす

熱砂ばかりもし青蜥蜴失なはゞ

乳母車夏の怒濤によこむきに

青葦原をんなの一生よ透きとほる

百足虫の頭づくだきし鋏まだ手にす

万緑やわが額ぬかにある鉄格子

鷺撃たる羽毛の散華遅れ降る

鷺撃たれし雪天の虚のすぐ埋まり

蠅けは化粧うしろひあかざるを後より打つ

匂ひ失せしをとめ滝よりつれもどる

この雪嶺わが命終に頭ちて来よ

夫の忌日に

木犀や記憶を死まで追ひつめる

沼みどり瞳しぼつて恋の猫

山蛾食ひ切子ふたたび明もどす^{めい}

火蛾捨身流れ流れて大切子

摂理罅走る雪溪滅びのとき

この風にこの枯蘆に火かけなば

晴れて到る人の訃シベリヤ高気圧

垂直に崖下る猫恋果たし

藤盗み足をぬらして森を出る

漬梅と女の言葉壺に封ず

わが寢屋の闇の一角白破魔矢

糲殻の深きところできりんご触れ

三鬼氏を悼む

眼にあまる万朶の桜生き残る

わが寢屋に出でし百足虫は必殺す

蜥蜴食ひ猫ねんごろに身を舐める

指の間に枯葉の音す蜻蛉の翅

蜂の巣をもやす殺生亦たのし

猟銃音が山河を失ひし

氷塊の深部の傷が日を反す

雪の日の浴身一指一趾愛し

雪はげし書き遺すこと何ぞ多き

橋本多佳子句抄 藪野唯至選 完